
宰相閣下の使いっぱしり

小夜菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宰相閣下の使いつぱしり

【Nコード】

N9135X

【作者名】

小夜菊

【あらすじ】

トリップ先で、働きに出た24歳、橘亜里沙。人使いの荒い宰相閣下の下で、ひーひー言いながら働く毎日。でも、この世界では女は文官になれないから、周りには男って言えといわれている。まあいいけど。どうせコルセット嫌いだし。ばれたら責任は取るって？ え、どんな責任???

1 (前書き)

初心者です。色々行き届かないところがありますが、よろしく願います。

「やっぱり行くのかい？」

スキュアード伯爵は、心配そうに麗しい眉をよせる。

すらりと背が高く、黒い巻き毛の美中年だ。

「何かあったら、すぐに帰ってくるのよ、約束よ」

不安げな顔つきの伯爵夫人。

お人形のように愛らしくって、しかもナイスバディ、

淡い金髪を結び上げて、首をちよつとかしげてるのは、

とても30歳とは見えない可愛さ！ さすが、現役の社交界の華。

二人は この世界での私の親代わりをしてくれている。

私は橘 亜里沙、とある地方都市の、小さな会社で事務員をして
いた。

頭も容姿もごくごく平凡、健康のみがとりえの24歳。

彼氏もなく、ちまちま働きながら、ベランダ園芸とハンドメイドを
趣味に、

地味に楽しく暮らしていた。

いや、マア 楽しいだけではなかったけど。

普通に暮らしていれば、人間いろいろあるもんだ。

でも、自分がいわゆる『トリップ』してしまうなんて、

まさか、まさか、ひとつかけらも予想してなかったよ。

自分のアパートで、いつもと同じように、ふつーに眠って、ふつー
に起きたはずなのに、

目覚めたら、いきなりバラ園のなかってどうよ！！

もし庭があったら、もっと花を植えられるのになー っていつも夢
みてたから、

てつきり、こりゃ夢かと思って、もう一度寝ようとしちゃったよ。

バラに水をやりにきた、庭師のおじさんが、私を見つけて腰を抜き、
しそうになつてたし。

私が迷い込んだのは、スキューアド伯爵家の庭のバラ園のなかだ
つた。

何もわからなくて、最初はパニック状態だったけど、
幸運ラッキーなことに、伯爵夫妻はとってもいい人達で、
突然迷い込んできた私のことを気の毒がつて、置いてくれるだけ
なく、

子供がいない二人は、私をとともかわいがつてくれた。

別の世界から来た事も、驚いてたけど、

「そういうことも、ごく稀まれにある、と聞いたことがある」って伯爵
が教えてくれた。

何でも、神殿？教会？ みたいなところに、以前そういう人が保護
されて居たらしい。

大分昔の話だつていつてたけど、決して無いことじゃないつて言わ
れて、

ちよつとホツとした。

だつて、そんなことありえないつて否定されて、

下手したら化け物扱いされるかもしれないつて、最初は思つてたん
だもん。

でも、伯爵なんて、「私達の娘にならないか」つて何度も言つてく
れるくらいに、
めっちゃめっちゃよくしてくれたよ。

あ、よくあることだけど、日本人つて若く見られるんだよね。

最初は15歳くらいだと思つてたらしい。

24つて言つたら引かれた。

で、行くところもないし、半年ほどは、この世界のことを教えても
らいながら。

豪華な伯爵邸で、何不自由なく暮らしてた。

ここは、グラナータって言う国で、王様が治めてる。

ちなみにグラナータ王は50代、美人のお后様に、王子がふたりと王女がひとり。

家族もちつてことは、恋愛フラグはたたないなって思いました。

うん、世の中そんなに甘くは無いね。

生活レベルは、よくわかんないけどヨーロッパ近世ぐらいかな。

車は無いけど、馬車はあるっていうような。

あこがれてた。イギリスのビクトリア朝って感じを思い出しちゃった。

ただ、生活に慣れてくるにつれ、だんだん何だかマズイと思うようになってたんだよね。

しよばい地方の事務員とはいえ、元は私も社会人として、何とか自活してたわけだし。

伯爵夫妻は「このままずっとうちに来てくれれば、いいお嬢さんを探してあげる」

って言うってくれるけど、

こんなわけわかんない女に、ここまでしてくれる、

お人よしの二人に、甘えてばかりいられないっしょ。

それで、いっちょ働いてみるか、と自活の道を探すことにしたわけ。

最初は女だし、侍女とか・・・って思ったけど、すぐあきらめた。だって生活常識とか、絶対足りないし。

侍女って、ご主人様の日常のお世話をするんだから、

この世界のことを殆ど知らないわたしには、ハードルが高い。

それに、ここでは女性は皆コルセットしてるの、これがまあくるしーのなんのって。

どういう拷問だよってくらい。

侍女だって、ゆるめだけど、コルセットしてるんだよ、それで肉体労働なんて、絶対無理!!!

で、ズボンはいて出来る仕事を探すことにしたわけ。

幸い、言葉も文字も、問題なく読めるし書けたのよ!

これぞトリップの特典?

元は事務やってたし、そういう仕事無いかなくて伯爵に相談したら、最初は散々渋ってたけど、お国の文官見習いならって教えてくれた。いわゆる公務員ってヤツですか。うん、事務系なら何とかなるかも?

で、伯爵のコネで、宰相閣下の下で働くことになったわけ。

いきなり宰相って!どうしてそんなお偉方のもってビビッたけど、なんでも宰相閣下は伯爵のお姉さんの息子、つまり甥っ子なので、ここなら、一応安心できるってことらしい。

「素性もわからぬ男の下で、働かせるなんて事できないっ」って、にわかパパですか。

「大丈夫ですよ、これでも結構たくましいんですよ、私。今まで、いろいろ教えてもらいましたし。」

「これからは自分の力でやってみたいんです」

私は不安な気持ちを押しかくして、にっこり笑った。

「アリスアー 無理しなくていいんだよ、僕らのことは、親代わりだと思ってくれば」

伯爵は、ため息をつきながら、豪華な椅子にすわりこんだ。

「外の世界には、狼がうじゃうじゃいるんだよ、アリスはかわいいからなあー」

「悪いやつに引つかからないといいけど……」

心配してくれるのはありがたい、が、ちょっと大げさすぎないか?

「仕方無いわ、あなた。　アリサの気持ちも大事にしてあげなくちゃ」

伯爵夫人は、可憐な見かけによらず、腹が据わってる。

見かけは立派な美丈夫だが、実は結構小心な伯爵をお尻に敷いて、いや、影で支えているのは　この、しっかりものの伯爵夫人なのだ。「だからって、何も男のなりをして、文官になろうなんて

もう心配でたまらないよ」

伯爵、その話は何回もしましたよ。

「ダイジョウブデス。別に女だって事隠すわけじゃありませんから」
「そうよ、宰相閣下には、このことはお話して、理解していただいたじゃないの。」

それにアリサは賢いわ、きっと上手くやるわよ。

そのかわり、ここを自分の家だと思って、困ったときはいつでも頼ってね」

伯爵夫人は、柔らかい微笑みをうかべて、私の手を握ってくれた。

「ありがとう、私がんばります」

目の奥がジンとする。　優しく暖かい伯爵夫人。

私のわがままを聞いてくれて、ありがとう。

その日の午後、私は伯爵家の馬車に乗って、王城に向かった。
スキュアード家の遠縁の娘として、

王城の宰相閣下の下で、文官見習い生活を始める。

いよいよ、この世界での独り立ちの第一歩を踏み出すのだ。

王城の廊下はぴかぴかに磨き上げられて、所々に窓から日が差し込んでいる。

自分の足音がコツコツ響くのを聞きながら、緊張で心臓がバクバクしてきた。

時間は早朝、私はただいま初出勤中。

案内をしてくれた男性の後について、宰相閣下の執務室に向かっ
ます。

昨夜は王城の事務官の為の宿舎の、小さな部屋をもらって休み、
今朝、宰相閣下にご挨拶にやってきた。

緊張の初出勤だから、遅刻しないように早起きして、
身なりは変じやないかと何度も点検してきたつもり。

背中まである髪は、後ろでひとつにしぼり、
伯爵夫人があつらえてくれた、ダークグレーのフラノの細身のパン
ツに、

上質な紺のベルベットの着、足元は黒いブーツ。
うし、がんばるぞ、と気合を入れてそつとドアを開ける。

豪華なじゅうたんと、使い込まれたオーク材のようなどっしりし
た家具が見える。

部屋には縦長の窓がいくつもあり、
カーテンの隙間から日が差して、ホコリが舞ってるの見える。
思ったより小さい部屋だ。

奥の広い机の上、横にあるサイドデスクの上、書棚の前、
いたるところにドカドカと書類が積み重なってる。

下手に近寄ると、山を崩しそうで怖い。

じっと目を凝らすと、書類の山の向こうに黒い頭が見えた。

あれが宰相閣下かな？

「失礼します、スキュアード家からまいりました、アリサです」
挨拶は大事だから、しっかりよね。

「……」

おかしい、返事が無い。

と思つたら、黒い頭がゆつくりと持ち上がって、ゆらりと立ち上がり、こつちへ近づいてくる。

げげげ、凄い美形、しかも若い。

伯爵も美中年だったけど、これは桁違いの美青年だ。

長くてまつすぐな黒髪、深い紫の瞳、整いすぎるほどの顔立ち、すらりとした身長。

足はどれだけ長いんでしょう… ぴったりとした黒の豪華な衣装が、まるで魔王のよう。

魔王（仮）はいぶかしげに私を見て、

「ふーん、お前がそうか」と言った。

低音のひびく声が腰にクル。美形は声もいいんだな。

それにしても、思いつきり上から目線ですね、宰相閣下。

そして、下から上へ、じろりと目をやると、

「女には見えんな」だつてさ。

くっ いきなり専制パンチですか。 心の中では、もう魔王決定だ。
どうせ私は凹凸とか色々足りんよ。

「申し訳ありません」 悔しいが、それでも上司、ここは大人の対応をせねば。

宰相閣下はじつと立ってる私の周りをぐるりと一周して、ソファにゆったり腰掛けた。

「私がジュード・ウインダーメアだ」

「伺っております。どうぞよろしくお願いします」

ジュード閣下は長い足を組み替えて、目を細めてこちらを見ている。

「最初に言っておくことがある。ここでは男として振舞うように」

えっ？

えっ えっ!？

何でそんなことになるの？

「恐れながら、スキュワード伯爵から、私は女だとお伝えいたしたいはずでは？」

「女が文官になどなれると思っているのか？」

ジュード閣下は言った。

「女官ではあるまいし、文官は男と決まっている。イヤなら辞めてもらおう」

えええー 話違うじゃん。

私は目を回しそうになった。

確かに、この世界は現代日本から比べると、色々封建的っていうか、古くさいって言うか、

男女の役割がはっきり分かれてるって思ってたけど、

伯爵は、ちゃんと事情を話して、理解してくれてるからって言うってたのに。

「しかし… 私は…」うつむいて、手を握り締める。

冷や汗がじんわりでてる。

「こちらが好きで引き受けたわけではない。

スキュアード伯爵にどうしても頼まれた故、

やむを得ず、雇うことにしたのだ。

イヤなら辞めるのか、男になるのか、どっちだ」

うーん、困った。男じゃなきゃダメなんて聞いて無かったよ。

でもあれだけ大騒ぎして伯爵家を出てきた手前、ハイ断られましたってかえるのも情けない。

それに、働いて自立したいのよ、私は。

くそー！ こうなったら、やるしかないのか？

「わかりました。出来るだけ隠すようにいたします。

しかし、万が一女と判ってしまったら…」

「ばれて困るのはお前だ。 ばれぬようにせいぜい努力しろ」

ジュード閣下は肘を立てた上にあごを寄せ、片方の唇を釣り上げてニヤリとわらった。

ぐぐぐ、いじめっ子だよこいつ！

「格好は、そのままが良いな。 名は… アリサのままではまずい。

そうだな、アリスティアでどうだ」

ひざ頭を指先でとんとたたきながら、ジュード閣下が言った。

何でもガンガン自分ペースで進めるタイプですね。

「わかりました。アリステアとお呼びください」

「では、早速仕事を始めよう。まずはお茶を入れてくれ」
閣下は、

これで問題は片付いた、といわんばかりに自分の机に戻り、
バサバサと書類を広げ始めた。

うう、やってけるのかな、私？

前途多難だわ… 肩を落としながら、私はお茶のありかを探しに
部屋を出た。

お城はとんでもなく広く、左右に伸びる廊下が様々に入り組んでいる。

ここが始めての私には、給湯室がどこにあるのか探すだけでも大仕事だった。

いや、この世界では、給湯室なんて言わないだろうけど。うろつろした拳句、やっと若い事務官らしい人を見つけて、連れて行ってもらえることになった。

「お前、来たばかりなのか？」

茶色の目をした、穏やかそうな彼が聞いてきた。

いかにも、人が良さそうで、真面目そうな、

将来いい父親になりそうなタイプかな。

多分、私のこと相当年下だと思ってるね。

「はい、今朝から、ジュード宰相閣下のところで働かせていただくことになりました」

問われるままに話していると、ジュード閣下の名前を出したとたん、彼はぴたっと足を止め、じいっと私を見つめた。

なんだか表情が真剣でコワイ。

「色々大変だろうけど、がんばってくれよ」

「はあ、ありがとうございます」

文官の事務所のようなところに連れて行ってもらう。

閣下の部屋に比べれば質素だけど、広くて机がいくつも並び、

人も多くて、話し合う声や書類をバサバサめくる音がして、活気がある。

隣にお湯を沸かせるようになっていて、茶器をしまっ棚には、一般の文官が使う茶色のそっけないマグカップから、

お偉い様向けの、豪華なカップアンドソーサーに、銀のスプーンまでそろっていた。

当然？茶葉も別々なんだって。

宰相閣下用は、お偉い様ゾーンにあるやつを使うそうだ。

繊細な薄い磁器、華麗な草花文様のカップに、

割ったらどーしよ、とちよっとびびる。

ちよつどいいので、ついでに周囲の人々に挨拶をする。

「初めまして、アリ・・っステアと申します。

今日から宰相閣下のところで働くことになりました」

普通こついう時は、挨拶を返してもらえるものと思っていたが、なぜか周りの雰囲気を変だ。

無視されてるわけじゃないんだけど、

目をあわせてくれなかったり、逆に「あーこんな子供がなあ」と気の毒そうにみる人も。

ここに連れてきてくれた彼が、「まあ、気にするな」って言う。

やっぱり子供って思われてるのかな。

うつむいていると、肩をポンポンとたたかれ、

「俺はサイモン・ドレイク。何か困ったことがあったら言って来い」

って言うてくれた。いい人だー

「はい、よろしく願います」

すると、遠目で見ていた他の人達も、わらわら近寄ってきて、

「つらい事があっても、がんばれよ」

「グチぐらいは聞いてやるからな」

「頼むから、やめるなよ」

うん？何だか風向きが変わってきたような。

励ましてくれ…てるんだよね？ 多分。

お茶をトレイに載せ、冷めないようにポットに布巾をかけて宰相閣下の部屋に戻ると

「遅い」と、閣下にならまれてしまった。

「すみません。ここは初めてなので、迷ってしまいました」

カップにお茶をついで机に置くと、閣下は一口飲んで、

「冷めてはいないようだな、まあいいだろう」と言った。

やった、グツジョブ、トレイを握り締め、心の中でガッツポーズ。

お茶の入れ方は、伯爵家の女中頭のロツタさんに頼んで、教えてもらったんだよね。

何もすることが無かったので、せめてその位は出来るようにしたかったのだ。

やっといてよかった。

「何をニヤニヤしてる」

しまった、顔に出ちゃった？

「いえ、何でもありません
ところで、私はどこで仕事をすればよろしいのでしょうか？」

「お前の居場所はあれだ」
閣下が指差した先には、書類が無造作に山積みになった子机が見える。

えっ

「あの、この書類は…」

「さわるなよ、全て重要なものだ」

えーっ うっそー

全然整理されて無いじゃん。

この中身を全部把握できてるはずがないよ。

そう思ってたなら、閣下が近寄ってきた。

上から適当にパツと書類を取ると、中身を見ずにとつとつと話します。

「これは王城の城壁の修理について、これは皇太后様の親戚の仕官の依頼、これは新年祭の警備について…」

う、すごい。

中身を見たら、確かにそれらしい事が書いてある。

若いのに、宰相の地位にいるのは伊達じゃないってことですね。

「では、私の仕事は…」

「お前はこれを侍従長に持って行け。必ず本人に渡すのだぞ。

返事をもらうまで帰ってくるな」

ポンと封筒を渡される。

「かしこまりました。侍従長様はどちらにいらっしやるのでしょうか？」

「そんなことはお前が考えろ」

ちらっともこちらを見ずに、閣下は言い放つ。

ふへー やっぱり魔王だよ。

私は再び城内をさすらいの旅に出ることになった。

部屋を出た私は、まっすぐサイモンの所に戻って、侍従長の居場所を教えてもらった。

「あー、多分会えるとは思っけどな、返事をもらえるかどうか…」

「え？」

「ジュード閣下の事だからな、きっと厳しい内容だと思うよ」

閣下は優秀だけど、要求もきついんだよな。

みんなそれがわかってるから、逃げるんだよ」

「侍従長様でもですか？」

「まあ、行ってみればわかるよ、がんばれ」

何だかもやもやしたまま。侍従長の部屋に行くと、初老の上品そつな白髪の男性が居た。

「ジュード宰相閣下のところから参りました。

お返事をいただく様に申し付かっております」

封筒を渡すと、侍従長はさっと中身に目を通した。

ところがすつと立ち上がると

「陛下の所に行かねばならないので、返事は後日としよう」

って言う。

いや、今内容見てから言ったでしょ、用事は逃げる口実なんだよね。

「あの、お返事いただかねば閣下のところに戻れないのです」
何とか引き止めなくちゃ、と気持ちが焦ってしまふ。

「陛下の御用を済ませるまで、返事は出来ない」

「では、ここでお待ちしています」
思わず口にしたら、侍従長は口元をくっつき締めて、何も言わずに出て行った。

わー どうしよ 怒らせちゃったかな。

はあ、ため息がでるけど、仕方ない。

これが私の仕事だし。

私はそこで立ちつくしていた。

昼が過ぎ、午後の陽が傾いてきて、部屋の中が夕日で染まる。

侍従長は戻ってこないし、たまに部屋に入ってくる人も何も言ってくれない。

途中どうしてもトイレに行きたくなって、部屋を出たけど、

それ以外はどこにも行かず、いや行けず、
モンモンとして待ち続けるばかりだった。

閣下は怒っている？ いない？

いや怒ってるに決まってるだろー

なんて、生産性の無いことを考えながら
ぼんやり窓の外を眺めていると、

侍従長が部屋に入ってきた。

妙なものでもみるような目つきで、私を見ると

「ああ、そういえば居たんだな」って言った。

くそ、ここで負けたらだめだ、

「はい。陛下の御用はお済でしたら、そろそろお返事をいただけませんでしょうか」

たとえどんなにお腹すいてても、どんなに腹が立っても、それを表に出しちゃダメダメ。

あくまでも、穏やかに、なんでもないような表情で聞く。

侍従長は、少しの間私を見ると、

「ずっとここに居たのか？」

そーだよ、ずーっとなあなたをお待ちしてましたよ、と言いたいけど。

「はい」ってにつこりする。

すると、ふんと息を吐いて

「出来ることはいたしましたよ、そう伝えるように」
って言った。

私やった？ やったよね？ ひゃっほう返事もらえたよ。

閣下の所にもどったら、部屋の中には誰も居なかった。

仕方ない、また待つか…

椅子に座ってぼんやりしているうちに、

だんだんまぶたが重くなってきた。

ちよつとだけ、ちよつとだけ、そう思って目をつぶると、いつの間にか意識を失ってた。

頬の辺りにピタピタと冷たい物が触れている。

ん、ん 何だっけ、と一瞬考えて、はっと気づくと、
長い睫毛に縁取られた、ガラスのような紫の瞳。
うわっっ 闇下だっ。

長い指先が、私の頬に当たっている。

こんな至近距離に、美しすぎるお顔を見せないでください
慣れてないので心臓に悪いよ。

「す、すみませ…」

「ゆっくり休めたようだな」

うう、言われちゃった。

「戻ってこないの。逃げ出したかと思ったが」

そんなヘタレだと思われてたの？ ちょっとショックだ。

「当たり前です。仕事ですから」

ついムキになって言ってしまった。

「ふん、明日からもおなじ事が言えるといいな」

美しい黒髪をさらりと揺らして、闇下が言う。

ええ、ちゃんとやりますとも、と心の中では言っていたけど、
それは甘かった、って事にすぐに気づくことになった。

閣下の仕事は、一言で言っても多忙を極めていた。

一日中ひっきりなしに来客があり、閣下の出なければならぬ会議があり、

陛下の所に行くことも多い。

それに、わんさか届く手紙、それをさつと目を通して分類するのだが、

忙しすぎて、きちんと整理する暇が無いらしく、あちこちにポイポイ積んだ山ができる。

いつ雪崩を起こすか、ヒヤヒヤものだ。

部下である文官が数人いるのだが、とても処理しきれぬ量ではないようだ。

で、人を増やそうとしても、閣下のところは激務でわかってるから、

他の部署の文官たちには、避けられてばかりらしい。サイモンがあんな顔をしてたわけが、段々判ってきた。

まあ、閣下の言い分は、

「安易に使えぬ者を雇っても仕方ないからな」って、あくまで強気、いや上から目線。

まあ、機密事項も多いため、うかつに素性のわからない人は周りに置けないって言うのはわかるけど。

そんなわけで、入ったばかりの私は、貴重なペーパー、久しぶりの下っ端。

閣下だけでなく、先輩達にも気楽に用事を頼まれ、資料を探したり、手紙を届けたり、

お茶を入れたり、と、椅子を暖めている暇は無い。

「アリステア、お茶だ」

朝一に閣下の所にいくと、早速お呼びがかかる。

閣下の朝は早い。そして、夜は遅い。いつたい何時眠っているのやら。

それなのに、いつもお肌はピカピカ 髪はつやつや。

見た目は麗しいけど、中身はブラック魔王で人使いは荒い。

「それが終わったら、この件について、以前の資料を探しておけ」

「あの、それは何年ほど前の事なのでしょうか？」

これを聞くにはわけがある。

過去の資料は閣下の部屋横にある書庫にしまわれているのだが、この量が半端ではなく、しかも殆ど年代別になっているだけで、内容ごとには、大雑把にしか分類されていない。

PCでなんでもポンと検索できた現代人にとって、資料探しは大したことではないが、

ここでは全て手作業、アナログなのだ。

ヒントが少しでもないと、探す手間は膨大になり、

一枚の資料さがしは、杉山の中の花粉いっこを探すぐらい、とんでもないことになる。

「少なくとも10年以内だ」

ええー

それだけではどんな手を使って探せと…

涙目になりそうになった私を見ても、閣下の表情は変わらない。

「昼までには用意しておけ」

これ以上閣下の前にいたら、どんどん仕事を追加されそうなので、

さっさと書庫に行く。

うわー 運が悪けりや、今日中に見つけられないかも。

そもそも、こんな大雑把な分類なのがいけないのよ。

せめて、資料の内容が、ざっと判る様になっていれば……

そうだ、資料の見出しをどこかにまとめて書き出せばいいんじゃないの？

それがあれば、探す手間が随分省けるはず。

いいこと思いついたよ。

「資料は見つかったか」

「いいえ、まだです」

思わず声が小さくなる。

閣下のこめかみにピキッと何かが走った。うう

「あの、資料探しについて、思いついたことがあるんですが」

閣下に思いついたことを早速話すと、

「ふむ、それは面白いな…… いいだろう、やってみる」

わーやった！ 怒られなくてすんだみたい。

「ただし、お前がひとりでやれ」

「え、？」

「お前の提案だからな。それに他の者には別の仕事がある。手が空

「いているのはお前だけだ」

いや、私には雑用係という大仕事があるんですが。
上手くごまかして、閣下のお怒りをそらしたつもりだったけど、
逆にドツボにはまったかも。

「ああ、仕事の手が空いたときにやればよい」

ということとは、

「今の仕事をしながら、私一人でやるんですか？」

恐々聞いてみる。

「その通りだ。良くわかっているじゃないか」

閣下は机に肘をついて、にやりと悪魔の笑みを浮かべた。

魔王だー 魔王降臨だー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9135x/>

宰相閣下の使いっぱしり

2011年11月19日16時07分発行